

子供とつくる学び

本校の研究テーマである「子供とつくる学び」とは、『学ぶ側の論理に寄り添って、教材や学習課題と向き合うことを通して、授業の中で子供の中に問いが生まれること、または子供が学びに必然性を感じられることをその要件とし、他者とともに問題を解決する活動を通して、子供が生きた知識を習得していくことを目指すものである。』（本校研究主題総論参照）

本実践報告では、第一学年生活科「がっこうだいすき」の単元を基に身の回りの危険から命を守ることを学ぶ「安全科」の授業との教科横断的な実践を通して、どのように子供たちと学習を構築したかを記述する。子供とつくる学びを実現するため、筆者は以下の二点に留意してこれまでの授業を構成してきた。

①自助・公助・共助の視点を生かした見方・考え方 ②見方・考え方を生かすための手立て

①、②について、本実践を通して考えたい。

①自助・公助・共助の視点を生かした見方・考え方

本単元では、小学校第3年社会科で学習する「自助・公助・共助」の視点を基に授業を展開していく。

子供たちはこれまで、安全科の授業を通して、通学路に潜む危険性について学習してきた。この学習を通して、安全確認の大切さを学習し、「自助」の視点を獲得してきた。しかし、「自助」の視点だけでは、事故や事件を未然に防ぎ、安全・安心に登下校することができるとは言えない。そのため、この単元を通して、安全設備などの「公助」の視点と地域や保護者の方々、教員の見守り活動などの「共助」の視点を学習する必要があると考えた。この自助・公助・共助の見方・考え方を生かすことで、自分と社会がつながっている実感を持つことができ、より自分事として捉えることができるだろう。この学習が充実した学校生活を送ることにつながっていくと考えた。

②見方・考え方を生かすための手立て

「自助」「公助」「共助」の見方・考え方を働かせ、社会的事象を自分事にするための手立ては、大きく分けて二つある。

①各種資料の活用

登校時において多くの子供たちは、スクールバスを利用している。毎朝、教員と一緒にバスに乗車し、バス停には保護者の見守り当番の方が来てくれている。そこで、本時の授業では、「小学生が巻き込まれた事故の件数」などの資料を提示する。安心だと思っていた登下校には、様々な危険があることを理解すると同時に、「なぜ、自分たちは安全に登校できているのか」という問いが生まれるだろう。そして子供たちは、「自助」の考えのみならず、「公助」「共助」に着目し、関連付けていくと考えた。

②ゲストティーチャー

コロナ禍における学校生活しか経験していない子供たちは、外部の方々との交流経験がないに等しい。そこで、地域の見守りやパトロールをしてくださっている方に授業に参加していただく。地域の方の思いや願いに触れることで、社会的事象を自分事として捉えることができると考えた。

本教材における子供とつくる学び

生活科では、具体的な活動や経験を通して、身近な生活に関わる見方・考え方を生かし、自立し生活を豊かにしていくための資質・能力を育成することを目指している。この目標は、非常に社会科と親和性が高く、本教材で扱う「通学路の安全」で資質・能力を培うことができると考えた。子供たちは、これまで「事故や事件に気を付けて登校しよう」と安全確認の大切さ＝「自助」の視点を獲得し、日々安全・安心に登下校をしている。しかし、その視点だけでは本当に安全・安心な登下校とは言えない。子供たちに「小学生が巻き込まれた事故の件数」などのあえてネガティブな資料を掲示することで、改めて安全・安心な登下校について考えを再構築してほしいと考えた。通学路を見渡せば、ガードレールや道路反射鏡など様々な安全設備で溢れかえっている。また、保護者や地域の方々、教員の見守り活動も安全・安心な登下校の要因である。子供たちが置かれた環境を改めて確認することで、「公助」、「共助」の見方・考え方を生かすことができ、さらに安全・安心な登下校を実現ができるのではないかと考えた。また、本校の課題でもある地域とのつながりの希薄さについても地域の方に授業に参加していただくことで、子供とだけではなく、地域の方とも学びをつくっていきたい。

成果と課題

成果

①自助・公助・共助の視点を生かした見方・考え方

今までの登下校では、自分さえ気を付けていれば事故や事件に巻き込まれることなく、安全・安心に登下校できていると考えている児童が多数いた。

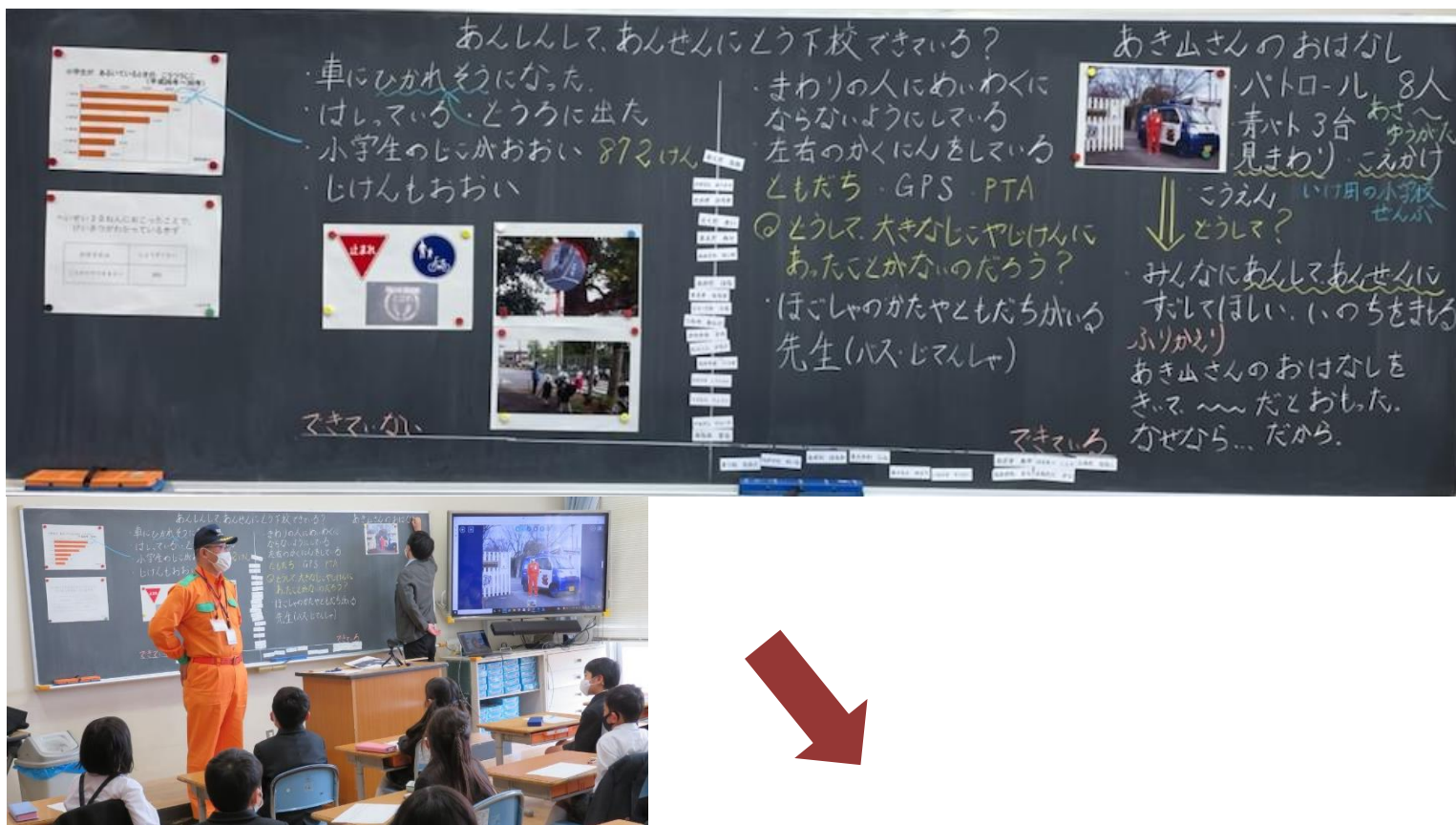
本実践を通して、自分たちを守ってくれている存在（交通安全設備や地域の方々や保護者の方々、教員）に気が付くことができた。また、自分を守ってくれている人たちに感謝し、事故に合わないようになろうとする姿勢が見られた。特に二点目の考え方は、事前に獲得した自助の考え方から公助・共助の考え方を学ぶことで、改めて自助について考えていることから本実践の中で、最も到達してほしい目標でもあった。本実践を通して、目標を達成できたことは成果と言える。

②見方・考え方を生かすための手立て

①でも記述したような「自分を守ってくれている人たちに感謝し、事故に合わないようになろうとする姿勢」を達成できた要因としてゲストティーチャーの存在が大きいと感じる。地域をパトロールし、地域の安全を守ってくれている方に授業に参加していただくことで実感することができたと感じる。

課題

本実践の課題としては、すべての児童が目標を達成できたとは言えないことである。小学1年生という発達段階では、「みんなが守ってくれている。」という認識で留まってしまっていた。さらに自分事として捉えるには、継続的な支援と指導が必要であると感じた。これからも安心・安全に登下校する児童の姿に期待したい。



見方・考え方を生かし、思考・判断・表現することで

見方
(身近な人々、社会及び自然を自分との関わりで捉える)
身近な人々、社会及び自然などの対象を、自分と切り離すのではなく、自分とどのような関係があるか意識しながら、対象のもつ特徴や価値を見出す。

考え方
(自分自身や自分の生活について考え、表現する)
身近な人々、社会及び自然を自分との関わりで捉えることによって、自分自身や自分の生活について考え、表現する。その結果から、考え直したり新たな思いや願いが生まれたりして、前の段階に戻ったり次の段階へ進んだりする。

ガードレールやカーブミラーは私たちを守ってくれていたのか。

地域や保護者の方々、先生たちのおかげで安心して学校にこれているんだ。

自分さえ気をつけていれば、事故に合わないと思っていたけど違うんじゃないかな。

みんな私たちに元気で学校に行ってほしいと思ってきているんだ。だから、わたしたちもその思いに応えたい。